

目的

一般に、急性リンパ性白血病は、フィラデルフィア染色体陰性白血病(non PhALL)と陽性白血病(PhALL)により治療法が異なります。(non Ph ALL/MRD2014プロトコール)

non PhALLでは、化学療法のみで長期生存が得られる場合があることが知られています。寛解導入療法1コースおよびその後の強化療法2コース後に、体内の白血病細胞の残存(微小残存病変(MRD))の有無を指標に、陰性例では化学療法のみで、陽性例では同種造血幹細胞移植を行うというリスクに応じた治療プロトコールを行っています。non PhALLへの同種移植適応例の基準を検証することを目的としています。(Ph ALL/MRD2014プロトコール)

Ph ALLの治療成績は、イマチニブといった分子標的薬の登場により治療成績が向上しています。本プロトコールでは、イマチニブを改良した第2世代であるダサチニブを使用する併用治療、同種造血細胞移植を施行しており、同プロトコールの治療効果・安全性を検証しています。ダサチニブを併用した治療法の確立を目指しています。